

The wave traveling all over the world

つぎへつ

2

2023年
1月



「テラ・ヘルツ」は、お寺の「寺」と未知の可能性を秘めた周波数の単位「テラヘルツ」をかけたものです。この冊子が目には見えな
い小さな波となって、みなさまの心に届いた
ら……そんなふうに願っています。

目次

凡愚のつぶやき	4
お寺の掲示板	8
教えて！ フダイシさま	10
くらしの知恵箱	13
こども部屋をノック	16
お坊さん WITH ナンタラ	18
門徒さんのおたより	20
煩惱ロボット メカムラケン	22

凡愚のつぶざき



花が散るのが無常なら　花が咲くのもまた無常

「年を重ねることは憂いではない。シミはブローチ、たるみはデザイン、イボは真珠」。法話の中で、このような話を幾度となく聴いてきた。年輪を重ねることが出る味は確かにあると思うが、微妙に符に落ちない。この話には加筆する必要がある。そう、「他人のシミはブローチ、他人のたるみはデザイン、他人のイボは真珠」なのだ。つまり、私のシミはやはりシミであり、嘆きなのである。

“自分”の問題になった時、物事は全く違う情景を映し出す。たとえ

ば己の身の上に災害や疫病、様々な困難が訪れると、「なぜこのようなことが起こったのか」と悔やみ、「どうして私だけ苦しまなくてはならないのか」との思いが沸き起こってくる。当然、苦しんでいるのは私だけではないが、視界が狭くなり他人のことを考える余裕などなくなる。

しかし、考えてほしい。私を中心に世界はあるのではなく、世界を構成する一人として私がある。現実に巻き起こる問題の多くは、私の思いを超えたところで展開されているのだ。

無常とは「いかなる存在も不変の本質を有しえない」という、私の思いを超えた真理を言う。どんなものも一定ではなく、刹那、刹那、変化を繰り返して、ひと時も同じ状態ではないことを指している。



無常と聴くとつい、「失われていく」ことを連想してしまうが、昔、
無常をテーマにこんな詩を書いた。

無常

花が散る。これ無常

花が咲く。これ無常

昨日歩けたおじいちゃんが今日歩けなくなった。これ無常

昨日歩けなかった赤ちゃんが今日初めて歩いた。これ無常

昨日生きていた人が今日死んでいる。これ無常

昨日お腹の中だった人が今日生まれている。これ無常

なぜだか小遣いを減らされた。これ無情

最後の一句は愛嬌だが……散るべき縁が整い花が散っていくことも、蕾つぼみが膨らんで花を咲かすことも無常なのだ。無常とは、いい時も悪い時も「このまま」は続かないという真理をあらわしている。この真理を心のどこかで受け入れるとともに、変わりゆく世界の中で、変わり続ける私（無常）を変わることのない仏さま（常住じょうじゅう）が、見捨てることなく包んでくださっているという温もりに気づいていきたいものだ。

生きていくからには辛いときもある

照る日くもる日いろいろさ

雨ふり風吹き　そして晴

これが人生　それが人生

やなせ　たかし

お寺の掲示板

寒いねと

話しかければ

寒いねと

答える人のいる

あたたかさ

俵 万智

うなずき共感してくれる
ものが傍にいることであた
たかい気持ちになります。

寒い日が続きます。思わず「寒い」とつぶやいてしまいますが、そんな時、「寒さに負けずに頑張れ」と言われるより「寒いね」と言われた方が、安心いたします。

私が中学2年、兄が中学3年の時に母が亡くなりました。弔問ちやうもんに来られた方々に「しっかりね」と言われ、泣くのは格好悪いと、必死で涙をこらえました。

そんな時、親戚の伯母さんが涙

ながらに声をかけてくれました。「お母さんが亡くなって辛いね、悲しいね」。その言葉に、こらえていた涙が一気に溢れ、泣きじゃくったことを、今でも鮮明に憶えています。

辛い時、悲しい時に「しっかり」と声をかけるのは、「私には関係ないが、あなたは」しっかりしなさい」という、体も心も別の人の言葉です。一緒に感じる「悲しいね」が、心に響くのです。

仏さまのお慈悲は「同体の慈悲」と言われています。慈悲の「悲」について、「羽が左右に反対に開いたさま、胸が裂けるような切ない感じのこと」と辞典にあります。それは、私の悲しみを自らの悲しみと引き受ける仏さまの心をあらわしています。

著 前住職 村上 充生

教えて！

フダイシさま

*フダイシさまは永照寺の経蔵の中にいる。
たくさんの経典が収められた輪蔵をお守りしている。



父は未婚の妹に、生前多くの現金を渡していました。

そのため父の残した遺産がかなり減っていました。

これをろ兄弟で等分するというのに納得がいきません。

どういう気持ちで対処したらいいのでしょうか？（62歳男性）



「あるものを人数で等しく分ける」というのが子どもの考える
平等の世界じゃ。そして「子どもみんなが、同じくらい仕合せしあわせで



あってほしい」というのが親の考える平等の世界じゃ。

そのため親の目から見て、不憫ふびんに見える子どもにも多くの愛情や金品を与えるのじゃ。もちろん、それは本当の平等ではないかもしれないが……まあ、そもそもの数式が違うのじゃよ。考えようによつては、そなたは親から見て「ちゃんと一人前で心配ない」と思われていたのかもしれないぞ。そういう考え方で対処してみてはいかがかな。

子どもが無駄遣いばかりして困っています。

どうすれば正しいお金の使い方をしてくれるでしょうか？

(31歳女性)



そういえば以前、「子どもが変な石ころを拾ってきて困る」という相談があったな。結婚の時に指輪についているキラキラした石ころは無駄遣いでないのに……不思議なもんじゃな。価値観はそれぞれ違うから、そなたにとって無駄に見えるものも、当人にとっては宝物なのかもしれないぞ。

そういう意味で、正しいお金の使い方というのは存在しないのだ。それよりなにより、そなたもダイエットすると言いながら、わざわざお金を払って無駄なカロリーを摂取してはいないかな？ え、無駄ではない。じゃあ子どもにとっても、無駄に見えるだけで無駄ではないかもしれないな。

くらしの



知恵箱

「こそ」で世界が変わる

「私が我慢しているからこそ家庭がうまくいっている」

「私が外で働いているからこそ家族が生活できる」

「誰しも自分に「こそ」をつけたくなるものです。しかし、「こそ」という言葉を相手につけてみてはいかがでしょう。」



「あなたが家庭を守ってくれるからこそ安心して働ける」

「あなたがいるからこそ衣食住に困らず安心して生活できる」

「こそ」のつけどころで世界は変わります。「こそ」は相手につけるもの。自分に「こそ」をつける人は、残念ながら“こそ泥”になってしまいます。

なぜ人は死ぬのか

本当の死因は、癌でも脳梗塞でもありません。生まれたことにあります。生き物が死ぬのではなく、死に物が偶偶たまたま生きているのです。たくさ

んの死ぬべき縁をくぐり抜け、偶然、呼吸をしているのです。

様々な事象をこの理ことわりの中にあてはめていくと、「あるものが無くなる」のではなく「もともと無いものが与えられていた」ということに気付かされます。出会いにしても、多くの偶然が重なり、その人と出会うことができたのです。

また、愛しい人と別れた時、喪失の悲しみははかりしれませんが、そればかりに心を奪われるのではなく、同じ時代に生まれ、同じ時間ときを過ごせた不思議に目を向けてみることも大切なのではないのでしょうか。

こども部屋をノック

アメとムチ

知人が「子どものしつけには飴と鞭むちが大切だ」と主張していました。「宿題をしないとオヤツなし」「勉強したらゲーム許可」など、甘やかす面と厳しくする面を併用することが重要だというのです。

私は、どういう時に飴と鞭の手法を使っているかと内省しました。「外食や厳粛な場で静かにしてほしい」「いい成績をとってほしい」「習い事をがんばってほしい」など、自分の思い通りに子どもを操る手段として使っていることが多いようです。その場は上手くいくので成功している



と思いがちですが、子どもの目には飴（ご褒美）しか映っていません。考えてみれば、「楽しい」「もっと知りたい」「うまくなりたい」といった子どもの自発的な感情を、飴で奪っているのかもしれない。

本当の「あめ」は、人から与えられるものではなく、自分で気づくものです。そして鞭とは、子どもに振るうものではなく、自分の思い通りに子どもを操ろうとする愚かな私に対して振るわれるものではないでしょうか。自己中心的なものの見方しかできない私を「無智」とするならば、「飴と鞭」ではなく、「あめと無智」の方が適切なのかもしれません。

お坊さん WITH ナンタラ

● 毎回ランダムにテーマを選び、エピソードを語ってもらいます。

お坊さんと色

みなさんもご存じかと思いますが、人間の目は光を借りなければ色が見えませんよね。これを借光眼しゃっこうがんと言います。太陽の光はプリズムで見ると7色になると言われますが、色は無数にあるそうです。たとえば一口に灰色と言っても何百種類もあるんです。人間の色彩感知能力はそこまです繊細ではありませんが、可視光線だけでも分析すればキリがありません。

人間世界の悲しさは色で差別し、同じ色を見ているはずの2人に違う



ものが見えていたりすることです。私たちが普段読むお経にはどう書いているでしょうか。

『阿あ弥み陀だ經』は、青・黄・赤・白の4色

『大だい無む量りょう寿じゆ經』は、黒・黄・赤・紫・青・白の6色

これらで色の元を表現しています。黒は黒、黄色は黄色、という別個の世界ではなく、黒は黒のままでありながらも、他の一切の色と調和している広大な世界をあらわしています。黒であることを自慢も卑下もしない、黒を変える必要がない……。他の色もそれぞれの個性をもったまま、他と自然に調和してゆくのです。私には難しいことですが、そういうさとの世界の言葉を感じていくことも大切です。

門徒さんのおたより



カラスも人も

(70代男性)

「おーい、今日も取られた」妻が「何を取られたか」と聞く。「朝早くから、大きな声でびっくりするじゃない」と妻は続けた。私は自身を忘れ怒髪どはつ天をつく思いで大きな声を出していた。カラスに熟れた柿を先に取られたのだ。怒る私に向かって妻が言った。「カラスは山に七つの子があるのよ。仕方ないじゃない」

私は我に返った。そうだ。カラスも人間と同様に一生懸命に生きているのだ。妻から「お寺の*おあさじは何のためにやっているの」と問われた。おあさじで、仏さまの慈悲の話を聞いているにも関わらずお恥ずかしい……。妻の言葉を通して自身のレベルを感じた。カラスさん、ありがとう！ また来てね。

*おあさじ……朝にお仏壇の前でお経をお勤めすること。

私の先祖

(30代女性)

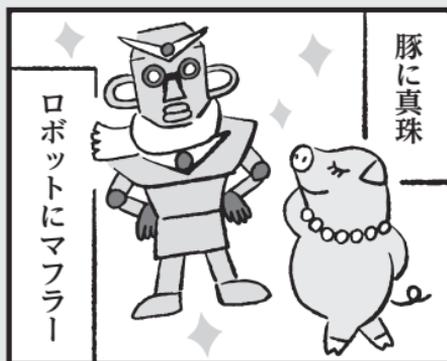
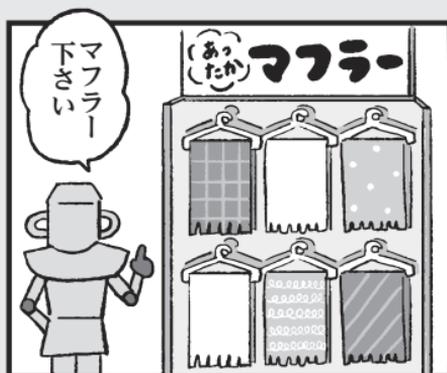
波の音が聞こえる。海沿いの懐かしい風景。祖母の訃報を聞き、鹿児島に帰ってきた。私は東京で働いており、葬儀には間に合わなかった。祖母の家にいくといつも仏壇に手を合わせる。仏壇の上には先祖の写真が飾ってあり、祖母が加わっていた。「帰ってきたのね」と祖母。

写真を見ながら、生前の頃の話に花が咲いた。曾祖母と祖母は敬虔な門徒だった。野良仕事をしながら遠

くにある岬のお寺まで、砂利道を歩いて1時間かけて通っていたそう。

私は「何も無い田舎は嫌だ」と思い都会に出た。しかし、こうして祖母の家に帰ってお墓参りをすると、過去との連続性は切り離せないものだと感じる。私の先祖は海の向こうから来たのかもしれない。厳しい土地で生きるために祖父母たちが努力した結果、今の私があるのだと、海を望む丘の墓地で思った。

煩悩ロボットメカムラケン



編集後記



年末年始は「Seasons of Love(愛に満ちた季節)」という曲を聴きたくなります。プロドウェイミュージカル「Rent」の挿入歌で、「525,600分(1年)をどう数える?」という問いかけから歌は始まります。夜明けや夕焼けの数。コーヒーを飲んだ数。笑った数や争いの数……。『How about Love? (愛はどうだろう?)』と続きます。人生にはたくさんの喜びや悲しみがあるけれど、どれも愛で読み解くことができる気がしてくるのです。みなさんの1年が愛に満ちた季節になりますように。

●「テラ・ヘルツ」は、みなさまからのおたよりやご意見感想を募集しています。以下のQRコード・ハガキ・FAX・メールなどから、お気軽にお送りください。

住所・名前・電話番号・年代・性別を
ご記入ください

〒803-0814

福岡県北九州市小倉北区大手町16-16

永照寺 テラ・ヘルツ係

Fax : 093-591-4989

E-mail : tera.hertz.book@gmail.com

スマホで
簡単



テラ・ヘルツ 2

発行 令和5年1月1日

発行 永照寺

執筆 村上慈顕、村上充生

編集 青木紀子

デザイン・イラスト 南佳奈江



To be continued...